

手足の不自由な子どもたち

はげみ

令和2年度/No.394

10/11

October—November

特集
衣服の工夫



第38回肢体不自由児・者の美術展入賞作品【兄とチューバ】
田中 博晶（15歳）



はげみ

令和2年度
10・11月号

はげみ通巻394号



目次

広場 おしゃれのスイッチを入れよう

～自分で自分の機嫌をとる、衣服の工夫とおしゃれのススメ…………… 澤村 愛…2

特集 衣服の工夫

総論1	私の第二の人生……………	長屋恵美子…4
総論2	肢体不自由のある子どもや成人と介護者の生活を彩る衣服……………	多屋 淑子…9
各論1	国リハコレクションについて……………	小野 栄一…16
各論2	ぬくぬく生きよう！……………	宇野 雅子…23
各論3	インクルーシブデザインの可能性～理学療法士の視点から～……………	国宝 孝佳…28
各論4	装いで人生をアップデートしよう……………	鈴木 綾…33
各論5	障害があっても、ファッションを諦めない……………	長屋 宏和…39
各論6	「心と身体にやさしいユニバーサルファッションショー」の 開催を続ける理由……………	栗田佐穂子…43
各論7	東京都立大泉特別支援学校の保護者室の事例……………	大島 七恵…49
各論8	衣服の工夫……………	圓井美貴子…54
		三好 久恵…55
		高松外美子…57
		張田 令子…59
		西長 和子…61
ミラコン	障がいのある人でも着やすい服を～未来への提言～……………	中原 瞳…63
今号の表紙	……………	田中 博晶…65



広場

おしゃれのスイッチを入れよう

〜自分で自分の機嫌をとる、衣服の工夫とおしゃれのススメ

全国肢体不自由特別支援学校PTA連合会 会長
東京都立光明学園 PTA会長

澤村 愛

手足に不自由のある方は、成長などに伴い身体が変形することが多く、既製服では対応が難しくなることが多々あります。体温調整が難しい方も多く、その場合は衣服を特別に工夫して、寒さや暑さから身を守ることが必要です。着脱のしやすさ、洗濯方法、扱いのしやすさも重要です。それらを上手に工夫することにより、QOL（生活の質）を向上することができます。

親が「わが子のために」と行っていた工夫に、当事者本人や医療関係者、服飾メーカーなどの視点が入ることにより、その世界が広がってきています。こうした工夫は「障害者のためのデザイン」とどまらない、汎用性の高い「インクルーシブデザイン」として、新しい価値も出てきました。衣服の工夫に障害の有無という区別は、必要ないのかもしれない。

私は機会があれば着物を着るように心がけています。24年前、英語が苦手な私が外国で0歳児を育てました。

昼間は母子2人きりです。英語のシャワーも日本語のシャワーも浴びていない長男のことが心配になりました。「このままでは言葉が出てこないのではないだろうか」。当時は、私自身の言葉まで出なくなってきたのです。

あるとき、夫が連れて行ってくれたホームパーティーに、思い切って着物を着て行きました。着物の話題から入ることで会話を自分に引き寄せることができました。始めの頃は予め英語のフレーズを丸暗記、一方的に話をしていましたが、やがて求められて、日本では作ったこともない「寿司や天ぷらの作り方教室」を現地の人相手に自宅で始めました。いつの間にか英語で会話ができるようになっていきました。

私は今、東京都立光明学園のPTA会長を務めています。入学式のときに着る着物はお祝いの気持ちの表現です。「入学おめでとう。みんなが来るのを待っていたよ。大切な光明の子。学校は安心安全なところだよ。さあ一緒に勉強しようね」。



また、私は全国肢体不自由特別支援学校PTA連合会(以下、全肢P連)の会長も務めています。日本肢体不自由児協会主催の肢体不自由児・者の美術展/デジタル写真展では特賞として全肢P連賞を贈らせていただいています。表彰式のときに着る着物は、お祝いの気持ちの表現とともに全肢P連の宣伝です。着物姿で注目をひくことで全肢P連のことを、肢体不自由校へ通う子どもたちの存在を、広く世の中へ知ってもらおうのです。「この度は受賞おめでとうございます。素晴らしい作品ですね。生きることは学ぶこと。学ぶことは生きる喜び。どうぞこれからも一生涯をかけて、作品作りを続けてください。皆さんの活躍は、私たちのはげみです」。

毎年2月になると、東京都肢体不自由特別支援学校ハンドサッカー大会が駒沢オリンピック公園体育館で行われます。学校対抗で行われるこの大会は、毎回付き添いの保護者や指導にあたる先生方も生徒たち以上に燃えています。令和元年度から東京都立光明学園では、ロータリークラブから寄贈いただいた揃いのユニフォームを全員で着て臨んでいます。次男は同じユニフォームを着る仲間とともに、心を合わせて戦いました。その夜次男は、「ユニフォームを脱ぎたくない」と大泣きをし、結局ユニフォームを着たまま眠りました。

私たちが子どもは障害者と言われます。手足に不自由があります。しかし心に不自由があるわけではありません。世の中では障害者のことを「見ないようにする」という傾向があります。

しかし、人間というのは「誰かに褒められたい」生き物

です。障害のあるなしに関わらず、男女の違いに関わらず、古今東西その気持ちは自然なものです。人間にとって、他人からきちんと注目されることは必要です。「揃いのユニフォーム、かっこいいね、おしゃれだね」と感想を言ってもらうこと、自分の存在に気付いてもらうことは、とても嬉しいことなのです。

当事者本人が輝いていると、周りの人もにこやかで明るくなります。「おしゃれ」とは、お金をかけることだけではなく、手をかけ心をかけることです。アイデンティティの表現、生きている証となることさえあります。たくさんの人にいっぱい褒めてもらうことができる「おしゃれ」とは、「自分で自分の機嫌をとる」心に働きかけるスイッチなのです。

今号では、「着たい服を諦めない」「障害者と介護者のQOL向上」などをはじめ、さまざまな視点から執筆いただきました。

皆さんも、おしゃれのスイッチを入れてみませんか。



ユニフォームを着ている次男